

『源氏積』現存諸本および 陽明文庫本『源氏物語』

における末摘花の呼称をめぐる

小林 雄大

一

藤原（世尊寺）伊行『源氏積』は、平安時代末期に著された『源氏物語』注釈書である。

・前田家本（桐壺巻・前2・八頁）

更衣うせ給て後ものゝあはれしりたる人くは心はせなとのなさけくしかりしをおもひいてゝ恋忍てなくてそ人はとかゝるをりにやと云所は

あるときはありのすさみにくかりきなくてそ人はこひしかりける^①

のように、まず『源氏物語』本文を抄出し、必要な場合には、物語の内容や展開を要約し、続いてそれに関する注を付すという形態になっている。

『源氏積』の現存諸本は、伊井春樹氏と田坂憲二氏^②によって、次のように分類されている。

・第一次原型本

北野本（末摘花巻後半部分および紅葉賀巻冒頭部分の断簡）

・第一次第一類本

「源氏或抄物」（抄出本）

・第一次第二類本

書陵部本（桐壺巻から明石巻までの残欠本）

・第二次本

冷泉家本（書陵部本の親本）
前田家本

これは、伊行の『源氏物語』研究の進捗状況を反映した位置づけであり、第一次本から第二次本に向かうにつれて、彼の研究が進展するとされている。これらの本文を一覧できる『源氏物語古注集成 第16巻 源氏積』（おうふう、平成十二年）を刊行した渋谷栄一氏は、同書解題で、「第一次本『源氏積』は世尊寺伊行の『源氏物語』講釈をまとめたもの」、「それに対して、第二次本『源氏積』は書物としてまとめたもの」とし、さらに、第一次本諸本間の揺れについても、「細かく見れば世尊寺伊行の読みと研究の進展度による異相とも係わるうが、大きく見れば第一次本内の折々の講釈による異相という側面もある

のではないかと指摘している。

このように、『源氏釈』の成立過程の解明や諸本の位置づけが試みられてきた一方で、抄出されている『源氏物語』本文がどのような写本に依拠したものかについても問われてきた。伊井氏は、

このように『源氏釈』に抄出された本文の系統をさぐっていくと、そこには青表紙本とはおよそ断絶した、別本と総称される傍流の物語本文が現前してくるのである。(中略) 現存諸本と比較してみても注目されるのは、別本の中でも陽明文庫本との近似性である。

と述べている。^④その後、伊藤鉄也氏が桐壺巻および玉鬘十帖を対象とし、『源氏釈』の抄出する物語本文が陽明文庫本に近似することを指摘し、伊井氏の見解を支持した。^⑤さらに、渋谷氏は、桐壺巻から若紫巻までを対象とし、『源氏釈』桐壺巻は陽明文庫本、麦生本、国冬本に、帚木巻は陽明文庫本に、空蟬巻は河内本や陽明文庫本、麦生本、阿里莫本に、夕顔巻は河内本、陽明文庫本、麦生本、阿里莫本に、若紫巻は河内本、中山家本に近似することを明らかにした。^⑥要するに、『源氏釈』の抄出する物語本文は、別本の陽明文庫本に近似することになるが、伊藤氏の研究は主に玉鬘十帖、渋谷氏の研究は桐壺巻から若紫巻までの考察に留まる。

ところで、『源氏釈』末摘花巻は、従来知られている北野本や『源氏或抄物』、冷泉家本、前田家本に加えて、池田和臣氏

により伝浄弁筆の断簡が近年発見され、『源氏釈』の研究にとって最も多くの本文が現存する重要な巻と言える。しかし、先に見たように、『源氏釈』末摘花巻に保存されている物語本文の性格については明らかにっていない。本稿では、まず、その検討からはじめたい。

次に、光源氏が末摘花の容姿を垣間見た後に、彼女の屋敷の庭園を眺める場面を取り上げる。

・前田家本(末摘花巻・前6・七十頁)

たちはなの木のうつもれたる隨身めてはらはせ給うらや
みかほに松木のをのれおきあかりてさとこほるゝゆきもな
みこすこゑのなとおほゆる所は^⑧

二重傍線部分に注目したい。前田家本は「なみこすこゑの」であるが、北野本、『源氏或抄物』、冷泉家本は次の通りである。^⑨

・『源氏釈』

(北) なみこすこゑの

(抄) 浪こすうへの

(冷) なみこすこゑの

(前) なみこすこゑの

北野本、冷泉家本、前田家本は「なみこすこゑの」であるのに対し、『源氏或抄物』は「浪こすうへの」である。

次に、『源氏物語』諸本の当該本文を見る。^⑩

・『源氏物語』

(大) なにたつすゑの

(尾) なみこすゝゑの(左傍書…他本名にたつ。引用者注)

(陽) なみこすゝゑの

(御) なみこすゝへの

北野本、冷泉家本、前田家本と同様に、「なみこすゝゑの」とするのは陽明文庫本のみであることに留意される。現段階で「源氏或抄物」と同様に「浪こすうへ」とする『源氏物語』本文は見出し得ない。

次は、末摘花巻末尾で光源氏と紫の上が末摘花の醜貌をめぐり戯れる場面である。

・前田家本(末摘花巻・前12・七十七頁)

むらさきのうへにはなへにつけてみせ給所御すゝりかめの水にかみをぬらしてのこひ給へは平中かやうにいろとりかえ給なとあるは

二重傍線部分「御すゝりかめの水にかみをぬらして」に注目する。ほかの三本は次の通りである。

・『源氏積』

(北) 御すゝりかめのみつに／かみをぬらして

(抄) 御すゝりかめの水に・／かみをぬらして

(冷) 御すゝりかめのみつに／かみをぬらして

(前) 御すゝりかめの水に・・／かみをぬらして

ここでは斜線の前と後との二区分で見えていきたい。『源氏物語』を見ると、

・『源氏物語』

(大) ナシ

(尾) 御すゝりかめのみつに／みちのくにかみをぬらして

(陽) すゝりかめの水に・・・／かみをぬらして

(御) 御すゝりかめの水に・／みちのくかみをぬらして

のように、大島本には当該本文が存在しない。先の伊井氏の指摘通り、青表紙本の大島本と『源氏積』との距離が窺える。北野本、「源氏或抄物」、冷泉家本の斜線より前の部分、「御すゝりかめのみつ(水)」に「は尾州家本、御物本と一致するが、斜線より後の部分、「かみをぬらして」は陽明文庫本とのみ一致する。一方、前田家本のように「御すゝりかめの水に」とする『源氏物語』本文は現段階で見出し得ないが、陽明文庫本「すゝりかめの水に」と、「御」がない点では相違するが、「すゝり」と「かめ」の間に「の」がない点においては一致する。

以上の検討から、『源氏積』末摘花巻に抄出されている『源氏物語』本文は、現存諸本間で異同は見られるものの、陽明文庫本に最も近似すると言える。そのため、本稿では、定家筆

本、明融筆本、大島本などを底本とする『新編日本古典文学全集』（小学館）や大島本を底本とする『新日本古典文学大系』（岩波書店）の本文を引用することは避け、陽明文庫本を引用本文とする。これは、加藤昌嘉氏が指摘する、

古典文学研究においては、どうも、藤原定家という存在が必要以上に神聖化されている、とおぼしい。（中略）定家筆の写本かそれを転写した写本が残っている場合、それは、古い写本を押しつけてまで、絶対的な權威を与えられる。

書写者によって改竄されていようとも、孤立的な本文を持つていようとも、現在残されているおよそ一五〇種の写本は、それぞれが『源氏物語』であり、すべてが『源氏物語』である。それらの本文が、各時代、どのていど揺れ動き、どれ以上は揺れ動かず、それらが、そのつど、どのように摂取されて来たのかを辿ることが、私の研究のコンセプトである。

という『源氏物語』本文および注釈史研究の現状における課題を踏まえた基本姿勢ともかかわる。

ところで、前述のように、『源氏釈』には物語本文を直接引くのではなく、物語の展開を説明、要約して挙げる箇所が見られる。

・前田家本（末摘花巻・前1・六十四頁）

大輔命婦すゑつむの事かたりいてたりきこゝろをなんなつかしきうへにかたらひ人とおもひたまへるときこゆれば三のともにていま一とさやうたてあらんと給ふ

・陽明文庫本『源氏物語』（末摘花巻・②二二四頁）

「容貌も、心ばへも、深きは、聞き知りたまはず。（中略）忍びやかに、かい潜めては、はべるべし。琴をなん、なつかしき声に、語らひ人に思ひたまへるべき」と聞こゆれば、「三つの友にて、いま一種や、うたてあらむ」とのたまひて、

前田家本の波線部分は、物語本文から直接抄出したものではなく、「大輔命婦」が「すゑつむ」について語り出したことを補足説明するものである。ここで、前田家本は、末摘花を「すゑつむ」と呼称している。

『源氏釈』に見られる『源氏物語』の人物呼称は、物語本文から採用されたものもあれば、独自のものもあり、さらに、一人に複数の呼称が採用されている場合もある。物語の登場人物をどのように呼ぶかは、『源氏釈』各本によって揺れている。

つまり、人物呼称の問題は、『源氏釈』の『源氏物語』享受の実態を窺わせるとともに、現存諸本の関係を明らかにする一指针ともなり得るのではないだろうか。

本稿では、陽明文庫本『源氏物語』に見られる末摘花の呼称の実態を確認したうえで、『源氏釈』現存諸本における彼女の

呼称の差異を見ることによって、従来指摘されている各系統の性格および成立過程について検証し、さらには、『源氏物語』享受の実態についても展望することとする。

二

本節では、陽明文庫本『源氏物語』における末摘花の呼称に注目する。結論的なことを先取りして示すと、陽明文庫本『源氏物語』において、末摘花は、主に「常陸の宮」や「末摘花」と呼ばれているが、この二種の呼称は意識的に使い分けられている。以下、このことについて具体的に見ていく。

次に、末摘花が「常陸の宮」と呼ばれる初例で、彼女とのやりとりが思うようにいかずに悩む光源氏が、仲立ちを頼んでいる命婦を責めている場面を取り上げる。

秋のころほひ、静かにおぼし続け、かの砧の音も、耳に過ぎて、恋しうおぼし出づるまゝに、かの、常陸の宮には、しばしば聞こえたまふに、なほおぼつかなければ、世づかず心やましげに、負けては、えやまじの心も添ひて、命婦を責めたまふ。¹⁴
(末摘花巻・②二六〇頁)

「常陸の宮」という呼称は、

故常陸の親王の、末にまうけて、いみじう悲しう、したまひし娘の、心細きさまにて、残りたるを、ことのついで

に、語り出でたれば、「あはれのことや」と心留めて、問ひたまふ。
(末摘花巻・②二二四頁)

とあるように、親王であつた亡父の任地に由来する。蓬生巻にも、

常陸の宮の君は、父親王の亡せたまひにし名残、また思ひあつかふ人もなき御身に、いみじう心細げなりしを、

(蓬生巻・④四六二頁)

と見られ、「故常陸の親王」の遺児である「常陸の宮の君」が親身に世話をする人のいない状態で、心細く生活する様子が語られている。この後、亡父が遺した屋敷に住み続けていた彼女のもとを光源氏が訪問し、二条東院へと迎えられることになる。「常陸の宮」と「故常陸の親王」の關係については既に論じられているが、「常陸の宮」の考え方や性格に亡父が強く影響を与えていることは、物語の展開からも窺われる。「我がかうまで見そめけんは、父親王のうしろめたしと、おぼしおきけむ魂の、通ひて、したるなるべし、とおぼす」(末摘花巻・②三三〇頁)と、光源氏が「常陸の宮」を「見そめ」たのは「父親王」の「魂」によるものだと考えていること、「親の御影とまりたる心地する、古き住み処と思ふに、慰めてこそあれ」(蓬生巻・④四七二頁)、「親のもてかしづきたまひし御心おきてのまゝに、世の中を慎ましきものにおぼして」(蓬生巻・④四八二頁)と、「常陸の宮」が古風な暮らしを続けるのは亡父の教えに従っているためであること、そして、光源氏が再来訪

する直前に「常陸の宮」が「昼寝の夢に故宮、見えたまひければ」(蓬生卷・④五三四頁)とあること等が具体的に指摘できる。

次に、初音巻を見る。

常陸の宮の御方は、人のほどあれば心苦しくおぼして、人目の限りばかりは、いとよくもてなしきこえたまふ。いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰へゆき、まして滝の淀み恥づかしげなる御かたはら目などを、いとほしとおぼせば、まほにも向ひたまはず。(初音巻・⑥二四二頁)

光源氏が二条東院へ迎えた「常陸の宮」のもとを訪れる場面である。「常陸の宮」を手厚くもてなしているものの、彼女の髪が加齢のため衰えていると、光源氏の視点を通じて語られている。この場面背景には、末摘花巻で光源氏が彼女を垣間見た際に、「頭つき、髪のかかりたる、ほどはしも、なべてならず、をかしげにて、めでたしと思ひきこゆる人人にも、をさをさ劣るまじう、見ゆ」(末摘花巻・②三三〇頁)と、髪を唯一賛美したことがかわる。後で見ると、彼女の背丈や鼻、顔色については、光源氏から酷評されている。

そして、行幸巻には、

東の院の人人も、かかる御いそぎは、聞きたまひけれど、とぶらひきこゆべき、数ならねば、ただ聞き過ぎしたるに、常陸の宮の御方、あやしうもの麗しう、さるべきこと

のをり過ぎぬ古代の御心にて、いかで、この御いそぎを、よそのことは聞き過ぎぬとおぼして、型のごとなん、し出でたまひける。(行幸巻・⑦二〇〇頁)

とある。玉鬘の裳着にあたって「常陸の宮」が装束を贈る場面である。二条東院の人々は身の程をわきまえて「ただ聞き過ぎしたる」という振舞いだが、「常陸の宮」は「古代の御心」故に玉鬘へ装束を贈ろうと考えている。この「常陸の宮」に用いられる「古代」という表現についても既に論じられているが、彼女が「古代のゆゑづきたる装束」(末摘花巻・②三三四頁)を身に付けていることや、光源氏へ贈った装束が「包みたる衣箱の、いと古代なる」(末摘花巻・②三四二頁)ものであったこと、屋敷の「御調度どもも、いと古代に、馴れるどもが、昔やうにて麗しき」(蓬生卷・④四七二頁)ものであったこと等からも、末摘花巻を象徴する表現だとわかる。

最後に、若菜上巻を取り上げる。

女君には、東の院にものする常陸の君の日ごろ、患ひて久しくなりけるを、もの騒がしき紛れにとぶらはねば、いとをしくてなむ。(若菜上巻・一九九頁)

陽明文庫本は別本とされるが、若菜上巻については青表紙本の本文に近似することが指摘されている^⑩。しかし、前述したように、『源氏釈』の抄出する物語本文は青表紙本とは隔たりがあるため、別本のほかの写本を見ると、阿里莫本は「ひたちの

宮」、保坂本は「ひたちの宮のきみ」としていることがわかる。そのため、ここでは阿里莫本に従い、「常陸の宮」として考察する。

光源氏が紫の上に、病気がちな「常陸の宮」のことを語る場面である。光源氏の言葉で初めて「常陸の宮」が呼称として使用されているが、これが「常陸の宮」に関連する呼称の登場する最後の物語本文となる。

見てきたように、「常陸の宮」は、末摘花巻で亡父の遺した屋敷に住む女君に用いられるのを初例とし、以後、彼女に強く影響を及ぼす亡「父」（蓬生巻）のこと、光源氏が賛美した唯一の身体部位である「髪」（初音巻）、彼女を象徴する表現の「古代の御心」（行幸巻）とかかわりながら、用いられていく。若菜上巻では、光源氏が「常陸の宮」の呼称を用いており、紫の上に病気がちな彼女のことを語る。そして、これを最後に彼女は物語から退場していくのである。

このように、親王であつた亡父の任地に由来する「常陸の宮」という呼称は、性格や容姿、行動などが彼女個人で取り上げられる場合に確認され、光源氏もそのように用いているのである。

それに対し、「末摘花」という呼称は、他の女性との比較のなかで、彼女の持つ滑稽性や没落した様子が強調、描写される場面に確認される。

次に、光源氏が「末摘花」と契りを結び、後悔していることを大輔命婦に告白する場面を取り上げる。

「なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖にふれけん色濃き花と見しかども」など、やがて上に、書きけがしたまふを、花の咎めに、あるやうあらん、と思ひあはせらるる折折の月影など、思ふが、いといとほしきものから、をかしうなりぬ。

（末摘花巻・②三四八頁）

この後悔は、次に挙げる「末摘花」の容姿に由来する。

まづ、居丈のいと高う、を背の、いたう長きに、さればよ、と胸つぶれ、たまふ。うちつぎて、あな片端と見ゆるものは、鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の御乗物と、見ゆ。あさましう高くのびらかに、先のかがまりて、赤らかに色づきたる、ことのほかに、うたてあり。

（末摘花巻・②三一八頁）

光源氏の「なつかしき」和歌に「末摘花」という表現が見られる。これを彼女の呼称と見るべきかは諸説あるが、ここは彼女の赤い鼻を「末摘花」にたとえたもので、人物呼称にまでは成り得ていないと考えられる。それは、次の一文からもわかる。

見送りて、添ひ臥したまへる、口おほひの側より、かの末摘花、匂やかに、見苦しうて、さし出でたり。

（末摘花巻・②三六四頁）

口を覆う手の端から「かの末摘花」が「さし出でたり」とあ

り、これも人物呼称とは言い難い。このように末摘花巻における「末摘花」は、人物呼称であると断言できず、むしろ赤い鼻の比喩表現として解されるのである。

次に「末摘花」が見られるのは、玉鬘巻である。

この、末摘花、言ふかひなかりしをおぼし出づれば、さやうに沈みて生ひいでたらん人のありさま、後ろめたうて、まづ、御文の、気色をゆかしう、おぼすなりけり。

（玉鬘巻・⑥一四八頁）

「末摘花」が「言ふかひなかりし」様であることを思い、彼女のように没落する中で成長した「人のありさま」が案じられるため、玉鬘の文を見たいと、光源氏が思う場面である。ここに見られる「末摘花」は赤い鼻の女君を指す呼称であると考えられる。玉鬘との対比によって、「末摘花」の没落した出自や人となりの滑稽性が描写されているのである。

玉鬘巻には、さらに二例、「末摘花」が見られる。

「いで、この容貌のよそへ、人腹立ちぬべきことなり。よきとても、ものの色は限りあり、人の容貌は、後れたるも、なほそこひあるものを」とて、かの末摘花の、料に、柳の織物に、よしある唐草を乱り織りたるも、いとなまめきたれど、匂ひ少なきを、人知れずほほ笑まれたまふ。（中略）みな、御返りどもただならず、御使の、心心など、見る中に、末摘花、東の院に、離れおはすれば、いま

少し、艶なるべきを、麗しくものしたまふ人にて、あるべきことは違へたまはず、山吹の桂の、袖口、すすけたるを、うつほにて、うちかづけたまへり。

（玉鬘巻・⑥一九四頁）

光源氏が「末摘花」に敢えて相応しくない立派な装束を贈っていること、それを贈られた「末摘花」は作法に従い、「山吹の桂の、袖口、すすけたる」装束を使いの者に被けたことが語られている。この前の部分には紫の上や明石の姫君、花散里の、続く部分には明石の御方や空蟬の装束について語られているが、「末摘花」だけが装束と容姿の不相応さを光源氏に笑われている。それは光源氏の、人と装束とは不可分だという考えによるものである。ここでも、紫の上や明石の姫君らとの対比によって、「末摘花」の滑稽性が強調、描写されている。

以上の検討から、玉鬘巻で「末摘花」は、光源氏によって玉鬘と対比され、彼女の人となりが回顧される場面や、紫の上や明石の姫君らと対比され、着る人と装束とは不可分だと考える光源氏が敢えて彼女に不相応な衣装を送り、それを笑う場面に確認できる。整理すると、「末摘花」が呼称として用いられる場合、他の女性と比較されることによって、彼女の滑稽性や没落した様が強調、描写されるのである。

このように、陽明文庫本『源氏物語』において、「常陸の宮」と「末摘花」という呼称は、意識的に使い分けられていると考えられる。

ほかにも、

「いで、例の艶なる」と憎みたまへば、「かの宮よりはべる御文」とて、取り出でたり。
(末摘花巻・②三四二頁)

かく、わざとがましく、のたまひわたれば、なほ煩はしう、女君の御ありさまも、につかはしう、よしめいては、見えたまはぬを、
(末摘花巻・②二六六頁)

女君の御乳母子の、小侍従とて、いとはなやかなる若人、心もとなく、かたはらいたしと思ひて、さし寄りて聞くゆ。
(末摘花巻・②二八二頁)

のように、末摘花を「かの宮」や「女君」と呼ぶ例も見られる。これらは『源氏釈』における末摘花の呼称の問題とかわるため、ここに付言しておく。⁽²⁰⁾

三

前節では、陽明文庫本『源氏物語』に見られる末摘花の呼称の実態について明らかにした。本節では、『源氏釈』現存諸本が末摘花をどのように称しているかを見ていきたい。その検討を通じて、各本の特徴および系統間の関係、さらには、『源氏物語』の享受の実態を窺うことができるのではないかと考える⁽²¹⁾。

まず、第一次原型本に分類されている北野本を見る。

①けんしのきみこの宮をなこりなくみあらはし給てなをあい

かたきはけにこそありけれ心とまるへくもあらすいとをしう人の御ありさまかなとうめかれ給へとつとめての御ふみはゆふつけてそありける

ゆふきりのはるゝけしきもまたみぬにいふせさまさるよひのあめかな

くも〇まちいてんほとはいかにく心くるしうとあり御返事女きみはおほしみたれてえつゝけ給はぬはしゝゆ(以下欠)
(末摘花巻・北2・六十六頁)

②さてほとひさしうなりてこのすゑつむつたへたりしたいふの命部あやしうかたはらいなきことのいとほゝゑみて申せはれいのいたくえんなるらんとの給にこれとてたてまつりたる御文を見給へはいたくきにあつこえたるかみににほひはかりはふかくしみてうたもてよくかきあはせたり

からころもきみかこゝろのつられはたもとはかくこそほゆつゝのみ

とあるをけんしこゝろえすとうちかたふき給へはつゝみにころもはこのいとこたいなるをつゝみてをしいてたりこれをいかてかかたはらいたく思侍さらんついたちの御よういとてかのみやよりさふらふめるいかてかひきかくし侍んとてさしいてたればひきかくされましかはいかによからましそてまきほさん人もなきみにとある所は

(末摘花巻・北6・七十一頁)

③又すゑつむはなのもとへとしかへりて正月七日よさをは

したればつとめてかへり給とてまたるゝものはさしをかれ
てまづ御ゆかしきとの給へはさへつるはるとからうしてわ
なゝかしいてたまへりされはよしへぬるしるしはとてい
て給うちわらひてゆめかとそおもふとくちすさみ給へりと
ある所は

(末摘花巻・北9・七十五頁)

北野本①では、「けんしのきみ」が「なこりなくみあらはし給」
ふ対象者を「この宮」としている。対応する『源氏物語』本文
を見ると、

かしこに、文をだにと、いとほしうおぼし出でて、夕つ方
ぞありける。雨降り出でて、所狭くもあるに、笠宿りせん
と、はた、おぼされずやありけむ。かしこには、命婦、待
つほど過ぎて、いといとほしう、心憂き、御ありさまか
な、と思ひけり。正身は、心一つに恥づかしう思ひつづ
けて、今朝の御文は暮れぬれど、なかなか、とかくも、知り
たまはざりけり。されど、取りて、見たまふ。

「夕霧のはるる気色もまだ見ぬにいぶせさそふる宵の雨
かな

雲間待ち出でんほど、いかに心もとなく」とあり。おはす
まじき気色なるを、人人も胸つぶれて思へど、「なほ聞こ
えさせたまへ」と、唆し聞こゆ。いとど、ものおぼし乱れ
たるほどにて、型のやうにも、え続けたまはねば、例の、
侍従ぞ教へ聞こゆる。

(陽明文庫本『源氏物語』末摘花巻・②二九二頁)

のように、「この宮」は当該本文に見られないことがわかる。
これは北野本が補い、場面の説明をしたものと解される。一方
で、①の末尾では、「おほしみたれて」の主語に「女きみ」を
補っている。①のなかだけでも二種の呼称が確認できるので
ある。

そして、②には、「さてほとひさしうなりてこのすゑつむつ
たへたりしたいふの命部」、「ついたちの御よういとてかのみや
よりさふらふめる」と、③には、「又すゑつむはなのもとへと
しかへりて正月七日よさをはしたれは」とあるのように、
「すゑつむ」、「かのみや」、「すゑつむはな」の呼称が用いられ
ている。

以上のように、北野本では、『源氏物語』当該本文に見られ
ない「この宮」、「女きみ」、「すゑつむ」、「かのみや」、「すゑつ
むはな」の五種の呼称が確認されるのである。

次に、第一次第二類本に分類されている冷泉家本を見る。

(1)たいふの命婦すゑつむのことかたりいてたりあはれのこと
やと心とゝめてとひ給きんをなんなつかしきこゑにかたら
ひ人とおもひ給へるなときこゆればみつのともにてはいま
ひとくさやうたてあらんとの給所

(末摘花巻・冷1・六十四頁)

(2)ものないひそといはぬためしにとよみてたまたすきはくる
しとの給所は

(末摘花巻・冷2・六十五頁)

(3) またその宮にふみをたにいとをしくおほしいて、ゆふつかたそ有けるあめふりいて、所せくもあるにかさやとりせんとなにおほされすやといふ所

(末摘花巻・冷4・六十七頁)

(4) すゑつむふるきのかはきぬをき給へりといふこと

(末摘花巻・冷5・六十八頁)

(5) ひたちの宮より御さうそくしてたてまつらせ給命婦人の御心にたかはしとて御らんせさせ給てこそはときこゆればひきこめられたらましかはからからましそてま^きほさん人もなきみにとあるところ

(末摘花巻・冷8・七十二頁)

(6) ^{ひたちの宮}御けしきのあらたまらんもゆかしきとの給へはさえつるはるのといふ所

(末摘花巻・冷11・七十五頁)

まず、冷泉家本(1)から(4)に注目したい。(3)を除き、「すゑつむ」と補われていることに留意される。(1)では、「たいふの命婦」が光源氏に「すゑつむのこと」を話していること、(2)では、「すゑつむのもとにて」と傍書し、光源氏が末摘花のもとへ足を運んでいること、(4)では、「すゑつむ」が「ふるきかはきぬ」を着ていることが説明されている。一方、(3)では、「その宮」と補われており、彼女が光源氏からの手紙を待っており、それが「ゆふつか」であったことが要約されている。

それに対し、(5)と(6)においては、「ひたちの宮」と補われて

いる。(5)では、「命婦」が光源氏に「ひたちの宮」から預かった装束を手渡すこと、(6)では、「ひたちの宮」と傍書し、光源氏が「ひたちの宮」の「御けしきのあらたまらんもゆかしき」と言葉にしたことが説明されている。

以上、冷泉家本では、前半部分に「すゑつむ」、後半部分に「ひたちの宮」と、当該物語本文には見られない呼称が補われているが、一例、「その宮」という呼称も見られ、計三種の呼称が確認されるのである。

見てきたように、北野本と冷泉家本に見られる末摘花の呼称は一定しないのに対し、「源氏或抄物」と前田家本では「すゑつむ」・「すゑつむ花」と統一されている。

次に、第一次第一類本に分類されている「源氏或抄物」を見る。

① 源氏雨ふりいて、所せくもあるにかさやとりせんとなにすゑつむのもとはおもはれすといふ所

(末摘花巻・抄1・六十六頁)

② すゑつむのもとにてけんし我き物はかたちかくれすとすむしたまふ所は

(末摘花巻・抄2・七十頁)

③ 又すゑつむ花のもとへとしかへりて正月七日おはしたればつとめて帰たまふとてまたる、物はさしおかれてまつ御けしきのあらたまらむかゆかしきとのたまへはさへつる春といとからうしてわな、かしいて給へりされはよしへぬる

しるしなしとていたううちわらひ給て夢かとおもふとく
ちすさみ給とある所は (末摘花巻・抄7・七十五頁)

「源氏或抄物」①には、「源氏」が「すゑつむのもとはおもは
れす」と補われている。②も、「すゑつむ」に対して光源氏が
「我き物はかたちかくれす」と口ずさんだことを、③も、光源
氏が「すゑつむ花のもとへ」「正月七日」に参上したことを説
明している。

以上のように、「源氏或抄物」には、当該物語本文には見ら
れない「すゑつむ」が二例、「すゑつむ花」が一例、確認され
るのである。

最後に、第二次本に分類されている前田家本を見る。

(一)大輔命婦すゑつむの事かたりいてたりきこゝろをなんなつ
かしきうへにかたらひ人とおもひたまへるときこゆれば三
のともにていま一とさやうたてあらんとの給ふは

(末摘花巻・前1・六十四頁)

(二)すゑつむ御装束たてまつれるを命婦みせきこゆればひきこ
められたらましかはかうくましゝそてまきはさん人もな
き身にとあるは (末摘花巻・前8・七十二頁)

前田家本(一)は、「大輔命婦」の「かたりいて」た内容が「すゑ
つむの事」であると、(二)は、「すゑつむ」が「御装束をたてま
つれる」としている。

以上、前田家本には、当該物語本文には見られない「すゑつ
む」という呼称が二例、補われている。

四

前節で確認した『源氏積』現存諸本における末摘花の呼称の
実態についてまとめたものが、次の表である。

〈『源氏積』現存諸本における末摘花の呼称〉

	北野本	冷泉家本	『源氏或抄物』	前田家本
三		(1)すゑつむ		(一)すゑつむ
六		(2)すゑつむ		
八	①この宮・女きみ	(3)その宮	○すゑつむ	
一〇		(4)すゑつむ		
一三			○すゑつむ	
一四	②すゑつむ・かのみや	(5)ひたちの宮		
一七	③すゑつむはな	(6)ひたちの宮	○すゑつむ花	(二)すゑつむ

最上段の番号は『源氏物語古注集成』によるもので、項目番号
を示している。斜線は項目自体が存在しないことを、空白は末
摘花の呼称が見られないことを表す。

整理すると、

・(項目番号三) 冷泉家本(1)と前田家本(一)には「すゑつむ」
とある。

・(項目番号八) 北野本①には「この宮」、冷泉家本(3)には
「その宮」とあり、「宮」を意識した呼称
が見られる。これに対し、「源氏或抄物」

①には「すゑつむ」とある。

・(項目番号一四) 北野本②には「すゑつむ」・「かのみや」、

冷泉家本(5)には「ひたちの宮」、前田家本

(二)には「すゑつむ」とある。

・(項目番号一七) 北野本③と「源氏或抄物」③には「すゑ

つむはな(花)」とあるのに対し、冷泉家

本(6)には「ひたちの宮」とある。

以上のように、「源氏或抄物」と冷泉家本の間には共通する特徴がほとんど見られないことがわかる。加えて、先に論じたように、

・北野本と冷泉家本は末摘花の呼称が一定でないのに対し、

「源氏或抄物」と前田家本は統一的である。

という点からも見れば、現存諸本の関係については、次のことが言えるのではないか。

北野本は「この宮」、「女きみ」、「かのみや」、「すゑつむ(はな)」と呼称を統一していないことから、第一次原型本と考えられ、先掲した田坂氏の指摘が人物呼称の点からも首肯される。同様に、前田家本は「すゑつむ」と統一していることから、第二次本とする伊井氏の位置づけや渋谷氏の「書物としてまとめたもの」という指摘も肯定される。

問題となるのは、「源氏或抄物」と冷泉家本の関係である。「源氏或抄物」は、末摘花の呼称を「すゑつむ(花)」と統一し

ているのに対し、冷泉家本では、「すゑつむ」、「その宮」、「ひたちの宮」と一定でない。このことに注目するならば、「源氏或抄物」を冷泉家本よりも古態とする伊井氏の説は再考を要する。渋谷氏が指摘するように「伊行自身の」「講釈による異相」や「後世の人々の所為」等の可能性が想起される一方、人物呼称への注目が、『源氏釈』の諸本分類について、伊行の研究の進展のみに帰するのではないという新たな展望をひらく可能性も指摘し得るのである。

五

最後に、陽明文庫本『源氏物語』と『源氏釈』における末摘花の呼称の実態を比較したい。結論的に言うと、陽明文庫本と『源氏釈』における末摘花の呼称の在り方は異なる。確かに、末摘花巻における陽明文庫本の「かの宮」と、北野本の「この宮」や「かのみや」、冷泉家本の「その宮」は近似している。

しかし、前述したように、陽明文庫本末摘花巻に見られる「末摘花」は呼称と言い難く、また、玉鬘巻では他の女性との比較から彼女の様が描写されていた。それに対し、『源氏釈』末摘花巻において、「すゑつむ」・「すゑつむはな(花)」は、呼称として確立されており、また、他の女性との比較のなかで呼称が用いられているわけでもない。このことから、『源氏釈』現存諸本が抄出している物語本文については陽明文庫本と近似するものの、末摘花の呼称の実態について見れば、相違していることがわかる。これは、『源氏釈』が物語世界から離れた独自

の呼称の空間を作り上げているということではないだろうか。

本稿では、陽明文庫本『源氏物語』および『源氏釈』現存諸本間に見られる末摘花の呼称について考察してきた。まとめると、

- ・『源氏釈』の抄出する『源氏物語』本文は、陽明文庫本に最も近似する。

- ・陽明文庫本において、末摘花の呼称である「常陸の宮」と「末摘花」とは使い分けられている。

- ・『源氏釈』は、注を付す場面について説明する際、人物の呼称を補う場合があるが、これは、陽明文庫本に見られた使い分けに従うものではなく、物語世界から離れた独自の呼称の空間を作り上げている。

- ・『源氏釈』における末摘花の呼称は、諸本によって統一されているものとそうでないものとに二分されるが、この特徴が現存諸本の成立過程や位置づけを再考する手掛かりになる。

以上のことが明らかになった。

ここでは、末摘花の呼称のみを取り上げたが、わずかな用例による検討であることから、ほかの人物呼称とともに考察されるべきである。このような検討を通して、当時の『源氏物語』享受の実態だけでなく、先に課題として挙げた「源氏或抄物」と冷泉家本の関係を含め、『源氏釈』の成立過程や現存諸本の位置づけについても明らかにすることができるのではないかと

考える。

【注】

- (1) 『源氏釈』の引用は、渋谷栄一編『源氏物語古注集成 第16巻 源氏釈』(おうふう、平成十二年)により、北野本については北野克編『勉誠社文庫83 源氏物語抄 「末摘花」断簡』(勉誠社、昭和五十六年)、『源氏或抄物』については「新日本古典籍総合データベース」(<https://koensetsu.nijl.ac.jp/biblio/100130628/viewer/15>)、冷泉家本については財団法人冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書 第四期第三十七回配本 第四十二巻 源氏釈・源氏狭衣百番歌合』(朝日新聞社、平成十一年)も参照した。巻名・項目番号・頁数を記す。(北1)(抄1)(冷1)(前1)などの番号は同書によるが、これは(本の略称+当該巻の項目番号)を表したものである。二重打ち消し線でミセケチを示した。また、私に波線、破線、傍線、斜線、中黒を付した箇所がある。
- (2) 伊井春樹『源氏物語研究史の研究 室町前期』(桜楓社、昭和五十五年)。
- (3) 田坂憲二『源氏物語享受史論考』(風間書房、平成二十一年)。
- (4) 注(2) 先掲書。
- (5) 伊藤鉄也『源氏物語受容論序説―別本・古注釈・折口信夫―』(桜楓社、平成二年)、同『源氏釈』桐壺巻に抄出された本文の性格(日向一雅編『源氏物語 注釈史の世界』所収、青簡舎、平成二十六年)。
- (6) 渋谷栄一『源氏釈所引「源氏物語」本文について―「桐壺」「帚木」「空蟬」―』(源氏物語探究会編『源氏物語の探究』第十六輯所収、風間書房、平成三年)、同『源氏釈所引「源氏物語」本文について―「夕顔」「若紫」―』(伊井春樹編『本文研究 考証・情報・資料』第一集所収、和泉書院、平成八年)。
- (7) 池田和臣『源氏物語生々流転 論考資料』(武蔵野書院、令和二年)。
ただし、本稿では考察対象から省いた。別の機会に現存諸本と比較考察したい。
- (8) ここでは、『源氏釈』に抄出されている『源氏物語』本文を考察対象とするため、注記は省略した。前田家本と陽明文庫本の対応する箇所に私に破線を付した。

(9) 以下、北野本を(北)、「源氏或抄物」は(抄)、冷泉家本を(冷)、前田家本を(前)と略す場合がある。

(10) 注(6) 先掲書渋谷氏の研究を参考にし、青表紙本からは大島本(大)、河内本からは尾州家本(尾)、そして、別本からは陽明文庫本(陽)、御物本(御)を取り上げる。ただし、ここに挙げないほかの写本についても、池田亀鑑編『源氏物語大成 第一冊』(中央公論社、昭和六十年)、源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成 第二卷』(桜楓社、昭和六十四年)、源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成 続 第二卷』(おうふう、平成十七年)を用い、調査した。私に斜線、中黒を付した箇所がある。

(11) 『源氏釈』に抄出されている『源氏物語』本文は陽明文庫本に最も近似するが、御物本や尾州家本とも一致する事例が見られるため、別の機会に論じた。

(12) 加藤昌嘉『源氏物語』前後、左右(勉誠出版、平成二十六年)。加藤氏の指摘は、『源氏釈』が依拠した『源氏物語』本文の問題および注釈史のなかで伊行の注が顧みられなくなっていく問題、いずれにとっても示唆に富むもので、本稿をなすうえで、重要な教示を得た。

(13) 陽明文庫本『源氏物語』の引用は、注(10) 先掲書『源氏物語別本集成 続』により、巻名・別本集成続の巻数頁数を記す。財団法人陽明文庫編『陽明叢書国書篇 源氏物語』[複製篇][翻刻・解説篇](思文閣出版)も参照した。

(14) 以下、二節における『源氏物語』の引用は、注(13)と同様に、注(10) 先掲書『源氏物語別本集成 続』の陽明文庫本による。末摘花の呼称には私に傍線を付した。

(15) 原岡文子「末摘花考―靈性・呪性をめぐって―」(『日本文学』五十四巻五号所収、平成十七年五月)、大井田晴彦「父と娘の絆―俊陰女と末摘花をめぐって―(上)原作和編」人物で読む『源氏物語』第九巻―末摘花―所収、勉誠出版、平成十七年)等。なお、ここに挙げた諸論文における『源氏物語』引用は、『新編日本古典文学全集』による。今西祐一郎「古代の人、末摘花」(『秋山虔・木村正中・清水好子編』講座源氏物語の世界 第四集)所収、有斐閣、昭和五十五年)等。なお、今西氏の論文における『源氏物語』の引用は『日本古典文学』(朝日新聞社)による。

(17) 陽明文庫本『源氏物語』若菜上巻の引用は、財団法人陽明文庫編

『陽明叢書国書篇 第十六輯 源氏物語九』[複製篇][翻刻・解説篇](思文閣出版、昭和五十六年)をもとに私に改めた。巻名・複製編頁数を記す。

(18) 注(10) 先掲書『源氏物語大成』注(17) 先掲書解説。

(19) 池田亀鑑『合本源氏物語事典』(東京堂出版、昭和六十二年)「系図・人物呼称一覧」の「6末摘花」は、末摘花巻に見られる「末摘花」を呼称とする。一方で、岡一男『源氏物語事典』(春秋社、昭和三十九年)は、これを呼称としていない。「新編日本古典文学全集」では「姫君を末摘花と呼ぶのはこの歌(なつかしき)和歌。引用者注)による」と注する。「新日本古典文学大系」も同様である。なお、引用する『源氏物語』の本文について、池田氏の書籍は『源氏物語大成』を、岡氏は「青表紙本の本文のできるだけ純粋なもの」を採用している。

(20) 本稿は、陽明文庫本を引用本文としているため、他本に見られる末摘花の呼称については言及しなかった。ここでは、陽明文庫本玉鬘巻「すゑつむはな」(一九八頁)を、大島本や池田本 日大三条西本が「すゑつむ」としている例を指摘しておく。

(21) ここでは、『源氏釈』の見出し本文に末摘花の呼称が補足されている――『源氏物語』当該本文には見られない――項目のみを掲出し、それを傍線で示した。末摘花巻(冷3)(前3)には「おなし宮」(冷7)には「ひたちの宮」、蓬生巻(冷9)には「ひたちの宮」とあるが、これらは末摘花の邸宅を指していると考えられるため、考察対象から省いた。この傍書が、冷泉家本の書写者が付け加えたものか、その書写以前からあったものか、冷泉家本の本文を書写した人物とは異なる人が加筆したものか、明らかになっていない。調査、研究を継続していく。

(23) 注(1) 先掲書解題。

【付記】

本稿は令和二年九月の筑波大学日本語日本文学会第四十三回大会において、「末摘花の呼称に関する一考察」の題目で発表したものを加筆修正したものです。御教示を下された方々に御礼申し上げます。

(こばやし ゆうだい 筑波大学大学院人文社会科学研究所)